

## 論 説

# ヒムヤル王国トゥツバア朝の 実体に関する一仮説

——後世から見た3～6世紀の  
南アラビア・エチオピア関係——

部 勇 造

## はじめに

古代南アラビア史研究者が依拠する一次史料は、研究対象となっている当の時代に作成された碑文である。しかし一般的に言って、当事者の遺した碑文は事実のごく限られた一面を主観的に記したものが多し。その欠を補完する意味で、同時代の外部史料としてのギリシア語・ラテン語文献や東方キリスト教関係のシリアック文献、さらには後代に著されたアラビア語文献等の援用は不可欠である。

数多いムスリムの伝承学者や歴史家の中で、先イスラーム期の南アラビア関係の伝承について、最も権威ありと一般に認められているのは、いずれもイエメン・アラブのハムダーニー al-Hamdānī (893-945) とナシュワーン Naṣwān (1178没) である。後者作の『ヒムヤル頌詩 *al-Qaṣida al-Ḥimyāriya*』<sup>(1)</sup> に詳細な註解を施したのが<sup>(2)</sup>、フォン・クレマーが推察するように<sup>(3)</sup> ナシュワーン自身であったか否かは断言できない。しかしたとえナシュワーン自身でないにせよ、この註解者も彼に劣らず伝承に関する深い知識を有していたことは疑いない。この他にアビード ‘Abid b. Ṣarya (686頃没) とワフブ Wahb b. Munabbih (654/5-728/732) にも、古代南アラビアに関する詳しい伝承があり<sup>(4)</sup>、年代的にはこの二人の方が前二者より古いだが、にもかかわらずハムダーニーやナシュワーンの方に信がおかれている。

というのも、アビードの場合は種々の理由でその史的実在性その

ものが疑問視されているし<sup>(5)</sup>、他方ワフブについては<sup>(6)</sup> 彼がイラン系ユダヤ教徒の末裔であったために、その伝承にイラン的要素とユダヤ・キリスト教的要素がかなり濃厚に混入し、その分、史実性が希薄になっているのではないかと懸念されているからである。またイブン・ヒシャーム Ibn Hišām (832没) の『ワフブ・ブン・ムナッピフの伝に拠るヒムヤルの諸王に関する王冠の書』(以後『王冠の書』と略)の典拠が、書名通りにワフブの作品であることに疑念を抱く者もいる<sup>(7)</sup>。しかし何よりも、一次史料としての碑文から得られる知見と、これら諸伝承を照合してみると、確かにハムダーニーとナシュワーン(もしくは彼の『ヒムヤル頌詩』の註解者)の書には史実と合致する記事の割合が多く、この両者の伝に最も信を置いてきた通説の正しさに納得がいくのである。したがって本稿においても、主題のトゥッバア朝に関する伝承は主としてこの両名の伝に拠るが、これと比較する目的でイブン・ヒシャーム等の伝承も適宜参照する。

さて、アラブの多くの伝承によると、南アラビアのヒムヤル王国は3/4世紀から5世紀あるいは6世紀の初めにかけて、トゥッバア Tubba' (pl. Tabābi'a) と呼ばれる支配者によって治められていた。しかしこれが他称なのか自称なのか、最初に誰がこう呼ばれた(あるいは名乗った)のか、また厳密に誰と誰をこう呼べるのかといった点について、伝承により説が分かれている。呼称の意味・語源・由来についても、アラビア語動詞 *tabi'a* (後に従う、続く、継ぐ) に語源を求める説の他に、ゲエズ語動詞 *tab'a/tabbe'a* (力強い、勇敢である) 起源説、古代南アラビアの族名 *Bata'* 起源説など諸説あるが<sup>(8)</sup>、いずれも一般に認めるところとはなっておらず不明である。

ナシュワーンによれば、タババーピアとはヒムヤルの王で、すべてハーリス・アッラーイシュ *al-Hārīt al-Rā'īs* の子孫達で、総数は70名であるという<sup>(9)</sup>。ハーリスによって強力な新王朝が開かれた感がある。しかし誰が最初のトゥッバアなのか不明であるし、ハーリスに遡るヒムヤル王族の系譜の中で、ナシュワーンが明確にトゥッバアと呼んでいる王は僅か4名にすぎない<sup>(10)</sup>。後述するような理

由で、ハーリスの治世は西暦200年前後に位置づけられる。3世紀は碑文が最も多く遺されているおかげで、当時の政治状況が比較的良好に判っている時代である。またこの時代以降、古い時代については史実性に乏しかったアラブの伝承が次第に信憑性を帯びてきて、碑文の記事との比較がある程度可能になってくる。そこで、この両種の史料を照合して、トゥッバア朝を、碑文によって知られているヒムヤル王国のいずれかの王朝に比定しようと試みた者もいるが、成功していない<sup>(11)</sup>。

ヒムヤル暦の紀元が遡及的に前110年に設定された理由を推察すると、ヒムヤル人達は自国の起源がその辺りにあると考えていたに違いない。歴史的にもこの王国の存在は前1世紀にはすでに確認できる<sup>(12)</sup>。その後、6世紀まで存続したこの王国の歴史上、後世の学者の目に西暦200年前後が画期と映った理由は一体何であろうか。それ以降の、タババーピアと呼ばれる支配者達は、どのような点でそれ以前の支配者達と異なっていたのか。碑文では支配者達は自他共にマリク malik (王)と称しており、トゥッバアという称号の用例は一つもない。にもかかわらず、何故彼らは後世こう呼ばれたのか<sup>(13)</sup>。そもそもこれは如何なる由来と意義を持つ称号なのか。これらの点の解明が本稿の主旨である。

## 1. 碑文に現れるヒムヤルの王名とタババーピア名の比較

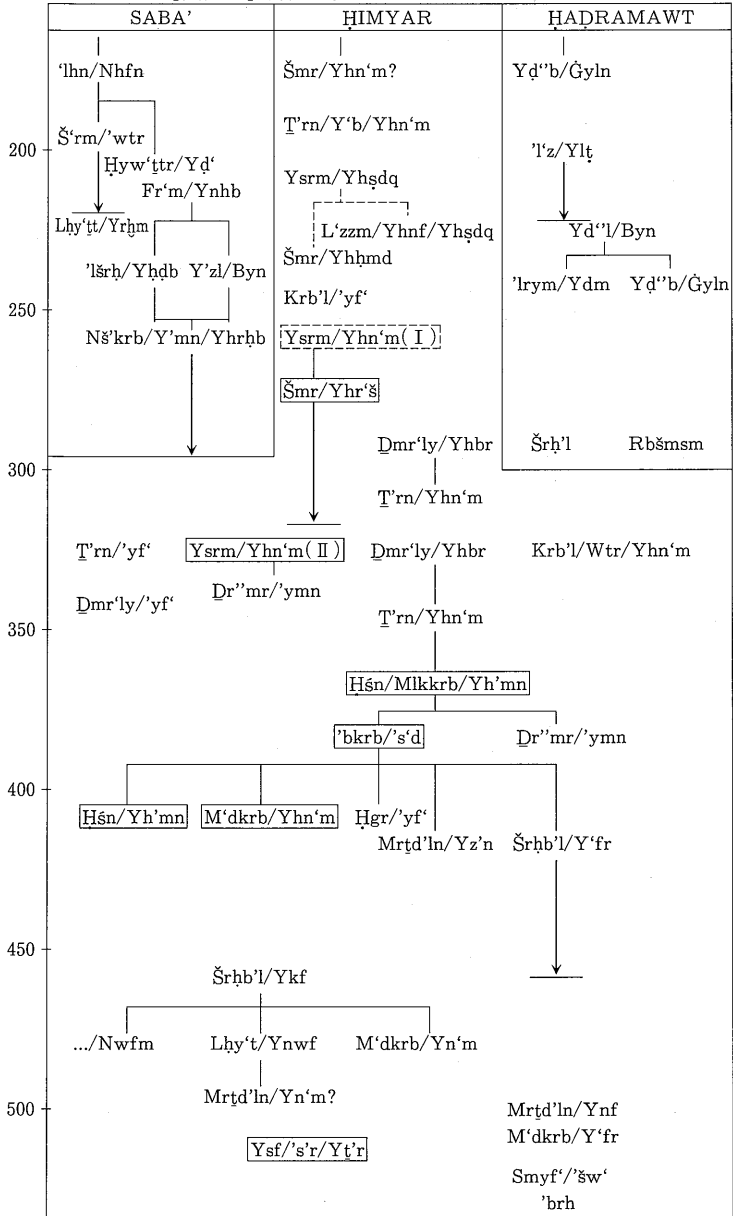
まず200年前後以降の時代について、碑文に登場するヒムヤル王の名を、隣接するサバアとハドラマウトの王の名とともに、ローマ字に翻字して系譜の形で表示したのが図表1である<sup>(14)</sup>。次いでハムダーニー<sup>(15)</sup>、ナシュワーンと『ヒムヤル頌詩』の註解者<sup>(16)</sup>、それにイブン・ヒシャーム<sup>(17)</sup>の伝える王と一部の親族の名を、やはり系譜の形で表示した(図表2-1、2-2、2-3)。これらを比較し、一見して同定可能と思える名をそれぞれ枠で囲んだ。このうち図表2-1、2-2のヤーシル・ユンイム Yāsir Yun'im は、一見すると図表1のヤーシル・ユハンイム Ysrm/Yhn'm 2世に比定できそうであるが、『ヒムヤル頌詩』で前者はシャンマル・ユルイシュ Šammar Yur'iš

[図表1] 碑文が伝えるヒムヤル王の系譜

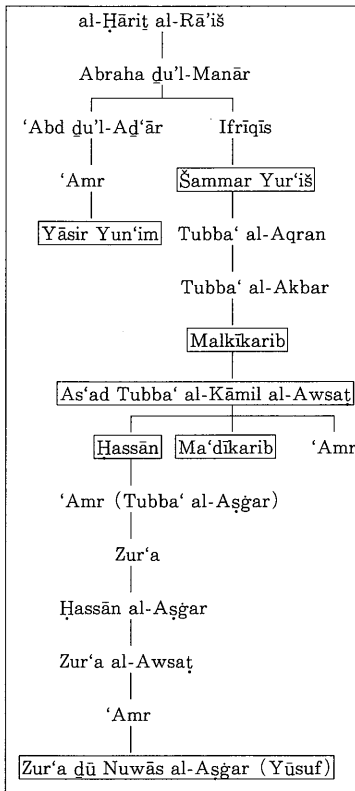
ヒムヤル王国トゥッパア朝の実体に関する一仮説

部

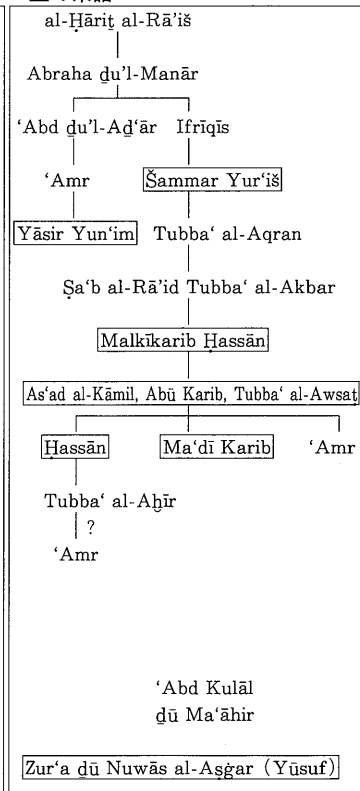
第八十六卷  
六二七



[図表2-1] ハムダーニーが伝える  
ヒムヤル王の系譜



[図表2-2] ナシュワーンと『ヒムヤル  
頌詩』の註解者が伝えるヒムヤル  
王の系譜



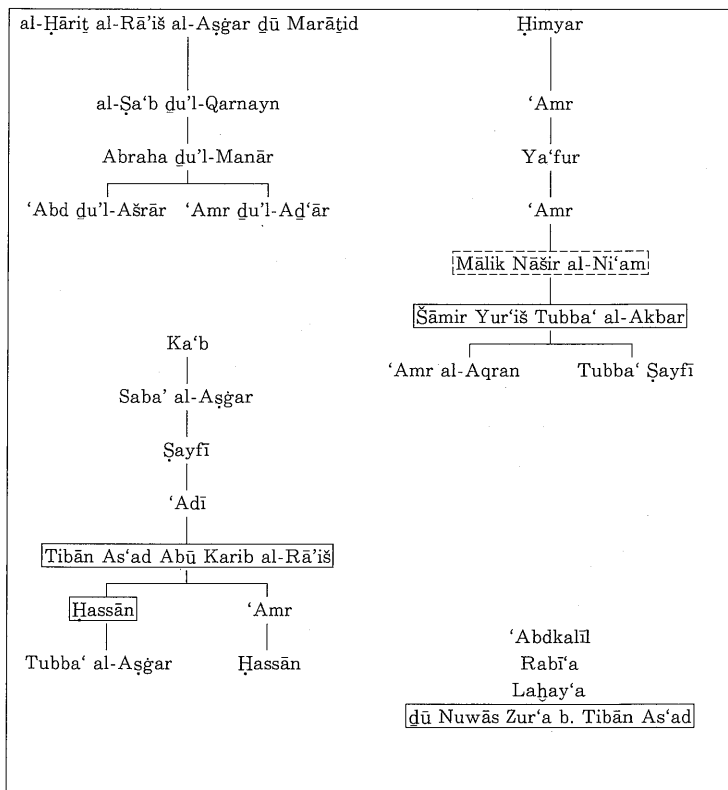
の一代前に言及されているので、むしろヤーシル・ユハンイム1世に比定すべきなのかもしれない。碑文ではこのヤーシル・ユハンイム1世がシャンマル・ユハルイシュ Šmr/Yhr'sの父で、イブン・ヒシャームの伝承を示した図表2-3にもこの関係が反映されている<sup>(18)</sup> ことから見て、後世にもこの父子関係は伝わっていたと推察される。にもかかわらずハムダーニーやナシュワーンは、何故シャンマル・ユルイシュの父をイフリーキース Ifriqīs としているのか。この点の解明が本稿の大きな課題である。

ともあれ、これらの図表を見ると、ハムダーニーとナシュワーン

[図表2-3] イブン・ヒシャームが伝えるヒムヤル王の系譜

ヒムヤル王国トウツバア朝の実体に関する一仮説

部



が名を挙げている支配者のうちの少なくとも7名を、碑文によって実在の人物であることが確かなヒムヤル王に比定できる<sup>(19)</sup>。これらのヒムヤル王のうち、シャンマル・ユハルイシュ、及びアビーカリブ・アスアド 'bkrb/'s'd とその一族は、ヒムヤル暦の研究を通じておおその在位年代が判明している。即ち、シャンマルのそれは3世紀の第4四半期から次の世紀の初めにかけて、またアビーカリブのそれはシャンマルの約100年後という点で、研究者の間に意見の大きな相違はない。とすると、シャンマル・ユハルイシュに比定できるシャンマル・ユルイシュから3代前の、いわゆるトウツバア

第八十六卷  
六二五

朝の創始者ハーリスの治世は、西暦200年前後、あるいは3世紀の初めに位置づけられる。

そこで問題になるのが、碑文から知られるヒムヤル王に容易には比定できない名を持った支配者、即ち図表2-1、2-2で枠で囲まれていない者達の正体である。特にシャンマル・ユルイシュに先立つ3代4名と、シャンマルに続くトゥツバアと呼ばれる2代の支配者は、名前も異名（エビテット）も、さらには伝わる治績にもかなり明確な個性が現れていて、後世に捏造された単なる虚構とは思えない。歴史上の实在の人物に関するやや臆気となった記憶が、デフォルメされた形で伝わっているのではないかと推察される。しかしシャンマル以前の4名については、試みにヒムヤルのみならず同時代のサバアやハドラマウトの王の名や治績と比較してみても、やはり比定は難しい。果たして彼らは何者であったのか。彼らと、ヒムヤル王としての史実性が確かな他の支配者達は、どのような関係にあったのか。この両グループは、ハムダーニーとナシュワーン（及び『ヒムヤル頌詩』の註解者）によれば父子関係で結ばれた一つの王朝を形成しているが、イブン・ヒシャームは、時には並立する複数の王朝が継起したという別の伝承を遺している。この違いの由って来るところは何か。これらの諸問題を解明する前提として、当時の南アラビアの政治状況を要約して以下に提示する。

## 2. 3世紀以降の南アラビアの政治状況

図表1からも看取できるように、2世紀から3世紀末までの南アラビアにはサバア、ヒムヤル、ハドラマウトの3王国が鼎立し、互いに抗争を繰り返していた。この状況は世紀末にヒムヤル王シャンマル・ユルイシュが、他の2王国を併合してこの地一帯を統一するまで続く。ところで、この図表からは窺えないが、第4の勢力としてこの時期の南アラビアの政治に甚大な影響を及ぼしたのが、エチオピアのアクスム王国であった<sup>(20)</sup>。碑文史料によると、遅くとも2世紀の末頃には、王自らが軍勢を率いてアラビア半島に進出している。当初はサバア、ハドラマウトと同盟してヒムヤルに対抗し

ていたが、やがてヒムヤル側を援助してサバアと戦うことが多くなった。このようにアクスムが同盟の相手を変えた最も大きな理由は、南アラビア諸王国間の勢力関係の変動であろう。ヒムヤルが3世紀初めに、おそらく王位継承を巡る内紛が原因で弱体化したのに対して、勢力を強めたサバアがヒムヤルやハドラマウトを圧倒する形勢となったのである。弱小勢力と結んで最強勢力と対抗するというのが、アクスムの基本戦略であったと推察される<sup>(21)</sup>。

進出が始まってからの数十年間で、サバア、ヒムヤル両国の沿岸部は、西の紅海側も南のアデン湾側もエチオピア人の占領下に置かれたようである。高原地帯にも南部には彼らの勢力が及び、最大の拠点となったサワーにはアクスムの王か王子がいて、そこから南アラビア各地に展開する部隊の指揮を執っていた。サワーに次ぐ重要拠点が、北部のオアシス都市ナジュラーンであった。碑文 Ja 577によれば、内陸キャラバンルートの要衝であったこの都市に、アクスム王は自らの代官 'āqib を置いていた。アクスム王が沿岸部のみならず内陸交通の要衝にまで支配の手を伸ばしたということは、彼が、インド洋と地中海を結ぶルートのうち、紅海を経由する海上路だけでなく、アラビア半島を横断する内陸の隊商路の掌握も企図していたことを示している。

3世紀半ば過ぎの事情を伝えて最も重要な史料は、ミイサール al-Mi'sāl の磨崖碑文群である。そのうちヒムヤル王カリブイル・アイファア Krb'l/'yf' の時代に属する2碑文 MAFRAY-al-Mi'sāl 2,3では、アクスムはサバア軍やハドラマウト軍と戦うヒムヤルに援軍を送っているように読めるが、次のヤーシル・ユハンイム1世時代の2碑文 MAFRAY-al-Mi'sāl 5,6では、アクスム軍とヒムヤル軍がアデンの支配を巡って激しく争っている。つまりここにおいて、数十年間続いたアクスムとヒムヤルの同盟関係が崩れた訳である。そして奇妙なことに、次のヒムヤル王、南アラビアの統一者シャンマル・ユハルイシュの時代の碑文からは、アクスムに関する記事が全く姿を消すのである。その事情には4世紀に入っても大きな変化はなく、アクスム関係の碑文は、シャンマル亡き後の混乱期に在



位したと思われるカリブイル・ワタル・ユハンイム Krb'l/Wtr/Yhn'm 王が、紅海を越えてアクスム王の許へ遣使したことを伝える Ir 28と、ヒムヤルの首都ザファールの火災を招いた戦いに、ハバシャ Hbšt<sup>(22)</sup> が関与したらしいことを伝える Gr 27の、僅か2点を数えるのみである。続く5世紀には、アクスムやハバシャに言及した南アラビア碑文は発見されていない。ようやく6世紀になって、10点余りの碑文に再びアクスムの侵入や彼らの支配に関する記事が現れるが、これらはいずれもヒムヤル王による領内のキリスト教徒の迫害と、それに対してアクスム王が行った遠征、及び戦後の支配に関連したものである。

要するに、3世紀末のシャンマルの時代から5世紀末に至るまでの200年余りの間、南アラビアの碑文史料からアクスム関係の記録がほとんど姿を消すのである。3世紀に比べて4～5世紀、特に5世紀に碑文の数そのものが非常に乏しくなるのは事実であるが、それにしてもシャンマル以前と以後のこの対照は顕著である。多くの古代南アラビア史研究者の解釈によれば、これは、シャンマルが南アラビア統一事業の一環としてアクスムの勢力をアラビア半島から一掃し、完全な独立を達成した結果であるという。しかし、アクスムの支援を受けてようやくサバア軍の攻撃を凌いでいたかに見えるヒムヤルが、突如それほど強力になったとは全く不可解である。また、種々の史料を通じて、3世紀から4世紀にかけて著しく勢力を増したことが知られているアクスムが、南海交易の利益のかかった紅海とアデン湾の制海権の回復も図らずに、アラビア半島から駆逐されたままになっていたというのも信じ難い。そこで目を当時の南アラビアの外に転じて、問題の3世紀半ば以降のアクスム側の史料や、数は多くないがギリシア語とラテン語の記録、さらに後代のアラビア語文献などを調べてみると、通説に反して、アクスムが南アラビアに依然として強い支配力を保持していたらしい様子が窺えるのである。この点について筆者は別稿<sup>(23)</sup>において、すでにかなり詳しく論じたので、ここでそれを繰り返すことは控える。ただ、その論考の中で、アクスムの南アラビア支配説を主張するために挙げ

た第14番目の論拠の詳しい展開が、本稿の主題であることを、ここで明記しておきたい。

### 3. トウツバア朝の実体に関する一仮説

先にも記したように、シャンマル・ユルイシュに先立つ4名の支配者と彼に続く2名のトウツバアを、当時の南アラビア諸王国のいずれの支配者に比定することもできない。また西暦200年前後にヒムヤルに新しく強力な王朝が出現したという伝承は、3世紀に入ってからむしろ弱体化したヒムヤル王国の実情に照らすと、不可解と言う外ない。同様に不可解なのは、ほぼ同じ時期に展開した南アラビア諸王国とエチオピアの和戦両様の関係が、一見したところ、後世のアラビア語文献の中で全くと言ってよいほど言及されていない点である。そこで筆者は、これらの諸矛盾を解消し、当時の歴史過程を可能な限り整合的に説明するために、以下の仮説を提唱したい。即ち、歴史上の南アラビアの諸王に比定不可能な支配者達は、実はそれぞれが在位したとされる時期に、ヒムヤルに対して強い影響力もしくは宗主権を保持したアクスムの支配者ではなかったのか。それは自ら軍を率いて南アラビアに渡り、ヒムヤル王を助けてサバア軍と戦ったアクスム王であったかもしれないし、王の名代として指揮を執った王子であったかもしれない。特に強い影響力を持ったアクスム王の場合には、南アラビアに遠征するまでもなく、その名は紅海の対岸にまで聞こえていたことであろう。アラブの伝承でヒムヤル王の系譜上に彼らのアラビア語流に翻案された名が出現する時期は、おそらく弱体化したヒムヤルに対するアクスムの支配が、特に強く感じられた時期であったと考えられる。

では、実在のヒムヤル王に比定できる支配者達については、どのように考えればよいであろうか。彼らはアクスムの軛からヒムヤルを解放し、独立を回復することができた王達であったのか。筆者にはそうは思えない。少なくとも5世紀前半までのヒムヤルの支配者達が、ハーリス・アッラーイシュにつながる系譜上に位置づけられてタバーピアと呼ばれているのは、後世のイエメン人の目から見て、

この間のヒムヤルには、例えば西暦200年前後のトゥツバア朝の出現に匹敵するような政治上の大変動がなかったことを示している。また3世紀末から200年余りにわたって、アクスムに言及した南アラビア碑文がほとんどないことを見ても、この間、アクスムとヒムヤルの間で大きな戦いが交わされた形跡は認められない。このような点から判断して、3世紀以降ヒムヤルは基本的にアクスムの影響下に置かれていたが、その間、シャンマル・ユルイシュやアブーカリブ・アスアド一族のように、実在のヒムヤル王に比定できる支配者の名が系譜上に現れる時期は、これらの王の下でヒムヤル国内の政情が安定し、対アクスム関係においては相対的に独立性が高まっていた時期と捉えるべきではないだろうか<sup>(24)</sup>。即ちトゥツバア朝とは、ヒムヤルの歴史上に実在した王朝の伝説的翻案などではなく、3世紀以降の南アラビアにおけるヒムヤルとアクスムの政治的関係を、後世の学者が伝承をもとに擬制的な系譜の形で表現したものであったと総括できる。

この仮説を立証するために、以下においては、シャンマル・ユルイシュの前後6名の支配者と、史料上に現れるアクスムの王もしくは王子との比定を試み、最後にトゥツバアという称号の由来と意味について考察する。

#### 4. ハーリス一族とアクスム王／王子の比定の試み

図表3には3～4世紀の南アラビア語とゲエズ語、それにギリシア語の碑文に見出されるアクスムの王と王子の名前、アラビア語文献に見出されるシャンマル・ユルイシュの前後6名の支配者の名前、それに加えてエチオピア王名表Cグループ<sup>(25)</sup>に挙げられているアクスム王のうち、これからの議論に関わりのある者の名前を、それぞれ年代順に並べた。エチオピア王名表は、今問題にしている時期からは遙か後代に作成されたものであるが、このCグループにだけは各王の在位年数(図表の括弧内の数字)が記されていて、史料として利用価値がある。当時伝存していたアラビア語の年代記の他、ゲエズ語の碑文や民間伝承なども材料として作成されたのであろうと

推察されている<sup>(26)</sup>。図表の中で両端に矢印のついた線で結ばれた名前同士の比定の可否を、以下、順次検討していく。

ところで、人名がそれに固有の言語から別の言語に何らかの理由で取り入れられる場合、そのやり方には二つの方法があった。一つは、その名の意味は無視して、耳に聞こえた音だけをそのままの形で受け入れ、必要に応じて表記するというやり方で、一般にはこちらの方法がよくとられた。例えば、図表3に挙げた2世紀末から3世紀にかけての南アラビア語碑文に現れる6名のアクスム王族の名は、おそらく当時の南アラビアの人々の耳に聞こえたままを、彼らの文字で表記したのではないかと思われる。同じ名をエチオピア文字でも表記した例は一つ(Gdrt/Gdr)しかないのも、確かなことは言えないが、それらが本来のエチオピア文字による表記と一致していたという保証はない。

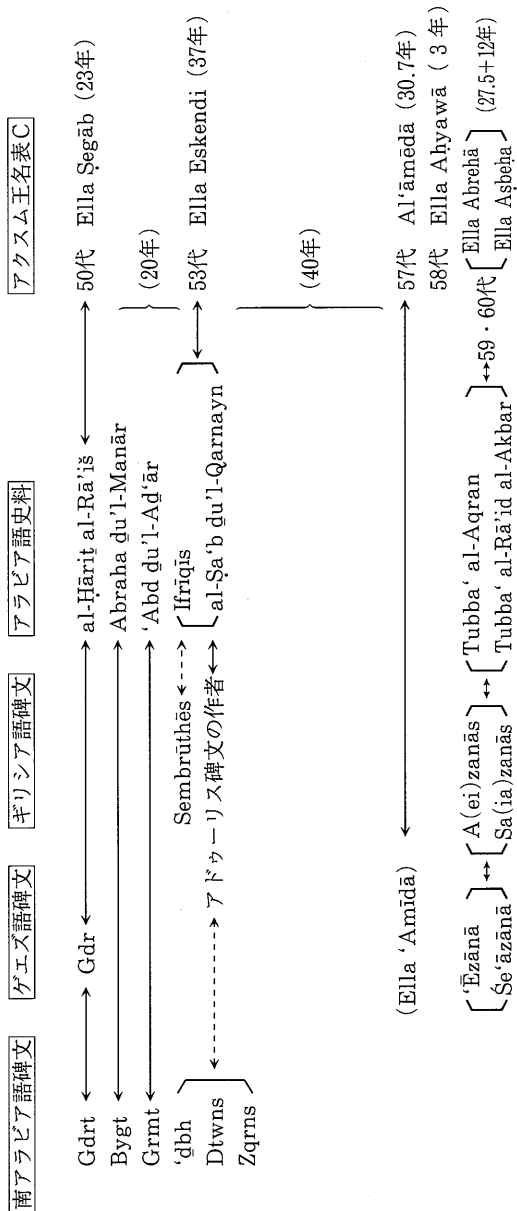
もう一つのやり方は、音を写すのではなく、外来の人名が本来持っている意味を、自言語に翻訳して取り入れるという方法である。例えば、アッシリア王エサルハドンの王妃はアッカド語で「純粋な」という意味のザクートウ Zakūtu という名であったが、同じ王妃がアラム語では、同じく「純粋な」を意味するナクィア Naqī'a と呼ばれている<sup>(27)</sup>。日本仏教にも同様の例があるので一つ挙げると、「阿弥陀」という仏の名は、サンスクリットの Amitāyus または Amitābhā の音写であるが、このサンスクリットを漢語に翻訳した「無量寿」および「無量光」も、阿弥陀の異称として通用しているのである。

さて、アラビア語文献の問題の支配者達の名と、碑文に記されたアクスム王族の名を比べると、一見して前者が後者の音写でないことは明らかである。そこで両者のそれぞれの言語における意味を比較してみることにする。前者はアラビア語で解釈するが、後者についてはゲエズ語だけでなく、隣接のセム系エチオピア諸語も参照しつつ語義を検討する。

(1) al-Ḥarīṭ al-Rā'īs と Gdrt (Gdr)

al-Ḥarīṭ (獅子) はアラビア語の男性名として珍しくなく、重要

[図表3] 王名対照表



なのは異名 Rā'is の方である。語根は RYŠ で、動詞 rāša の原義は「矢羽根をつける」、そこから転じて「獲得する、蓄積する、裕福になる」などの意味がある。因みに『ヒムヤル頌詩』によれば、この異名の由来は「ハーリスがカフターンのすべての翼を羽毛で覆ったから」である<sup>(28)</sup>。

他方の Gdrt は 2 世紀末から 3 世紀初めに、南アラビア碑文に初めて登場するアクスム王で、CIH 308 には「ハバシャの王 mlk/Ḥbštñ」、Ja 631 には「ハバシャとアクスムの王 mlk/Ḥbšt/w'ksmn」と記されている。一般にゲエズ語碑文 RIE 180 の「アクスム王 GDR Gdr/ngśy/'ksm」に同定される。ゲエズ語には GDR という語根はないが、隣接するティグレ語やハラル語にはこの語根から派生したと見られる「強い、大きい」という意味の語がある。ただ研究者の多くは、これらはいずれもアラビア語からの借用語で、本来の語根はアラビア語の QDR ではないかと指摘している<sup>(29)</sup>。qadr, qudra, qadār, qudūr 等この語根から派生したアラビア語名詞には、「力」の他に「富」という意味がある<sup>(30)</sup>。

アクスム王 Gdrt (Gdr) の名前の意味が、実際には「強い」であったのか「富裕な」であったのか判然としないが、アラビア側では後の方の意味を採ってこれを Rā'is と翻訳し、ヒムヤル王の系譜に組み入れたのではないだろうか。

因みにエチオピア王名表 C グループには、ほぼ同じ時期に第 50 代目の王 Ella Ṣegāb の名が見出せる。この王名表では、第 59・60 代目の兄弟王 Ella Abrehā と Ella Aṣbeḥa の治世中にキリスト教化が行われたと付記されているので、この両名は一般に 4 世紀半ばのエザナ 'Ēzānā 王兄弟に比定される。そこで彼らの在位年代から遡及計算すると、第 50 代目の王は西暦 200 年前後に在位したと推察できるのである。この王の名の Ṣegāb はゲエズ語で「豊富、飽満」という意味なので、おそらくアラビア語の Rā'is をゲエズ語に再翻訳して、王名表に取り込んだのではないかと考えられる。そのようなことを行ったというのも、王名表を作成した当時のエチオピアでは、ハーリス・アッラーイシュが実はアクスムの王であったこと

が、まだ記憶されていたからであろう。

## (2) Abraha du'l-Manār と Bygt

Abraha という名は同名のエチオピア人が6世紀にイエメンを支配したことによってよく知られている。語根 BRH はエチオピア諸語に共通して存在し、「光明」という概念を表している<sup>(31)</sup>。ゲエズ語の abreha は動詞の使役形で、語義は「照らす」である。アラビア語では音位転換の結果、動詞の形は bahara となっている。したがってこの名はゲエズ語名の母音を一部変化させただけの音写で、アラビア語への翻訳ではない。他方、異名の Manār は NWR を語根とするアラビア語動詞 nāra 「輝く」の派生語で、「光の見える場所、火の燃えている場所」を意味する。『ヒムヤル頌詩』によれば、彼が狼煙台を築いたことに因むという<sup>(32)</sup>。この場合には本名・異名ともに類似の意味を持っていたことになる。

一方の Bygt の名は、前出の南アラビア碑文 Ja 631に登場し、wld/ngšyn 即ち「アクスム王の子」と記されている。おそらく同じ碑文に登場する Gdrt の息子なのでであろう。ところでエチオピア諸語を含めセム系言語には BYG という語根は存在しない。そこで語根 BWG を参照すると、アラビア語動詞 bāga には「閃光を放つ」という意味があり、またティグリニヤ語にも bagg bala, bōg bala, baggbagg bala, bōgbōg bala という表現があつて、いずれも「輝く、閃く」という意味を表すことが判明する<sup>(33)</sup>。

この両者を比較すると、やはり前者は後者のアラビア語訳であった可能性が強い。

## (3) 'Abd du'l-Ad'ār と Grmt

アラビア語動詞 da'ara の意味は「怖がらす」で、『ヒムヤル頌詩』によると、彼の捕虜達の顔つきの下劣さに人々が恐れをなしたことが、この名の由来であるという<sup>(34)</sup>。

一方の Grmt の名は3世紀前半の南アラビア碑文 Ja 577と Ja 585に登場し、前者では Bygt と同じく wld/ngšyn と呼ばれている。おそらく Ja 577と対になっている Ja 576に登場するアクスム王 'dbh の息子であろう。GRM という語根はエチオピア諸語に共通

して存在し、動詞 *garama* はゲエズ語で「恐ろしい」、ティグリニヤ語で「驚かす」、また強調形の *garrama* はゲエズ語やティグレ語で「怖がらす」を意味する<sup>(35)</sup>。アラビア語名がエチオピア語名の翻訳になっているという主張に、おそらく最も異論の少ないのが、この組み合わせである。

#### (4) Ifriqis

ナシュワーンによれば、Ifriqis は 'Abd du'l-Ad'ar の兄弟で、その後を継いで王位に就いたという。また西方に遠征してイフリーキーヤを建設したが、その地名が彼の名の由来ではなく、逆にこの地名の方が彼の名に由来するという<sup>(36)</sup>。いま検討している6名の中で、最も奇妙で由来の分かりにくい名前を持った人物である。そこで試みに、語形は無視してアラビア語の同語根の語の中に手掛かりを求めると、*faraq* という名詞が「曙光」を意味するという、実に興味深い事実を指摘できる<sup>(37)</sup>。何故これが興味深いかという、図表2-3に示したイブン・ヒシャームがワフブの伝として伝えるヒムヤル王の系譜には Ifriqis は登場せず、代わりにハムダーニーやナシュワーンの伝承にない要素として *al-Ṣa'b du'l-Qarnayn* の名があるという、もう一つの謎の解明の手掛かりとなるからである。

*al-Ṣa'b du'l-Qarnayn* については、イブン・ヒシャームの『王冠の書』にワフブの伝として詳しく語られている<sup>(38)</sup>。それによると、彼は父のハーリスを継いで即位した後、神命に従って四方に大遠征を敢行した。この伝説は、プロットがアレクサンドリア起源の『アレクサンダー・ロマンス』に似ていることや、そもそも *du'l-Qarnayn* という名が、アラビア語ではイスカンダル即ちアレクサンダーの別名であることから、一般に『アレクサンダー・ロマンス』の翻案<sup>(39)</sup> の一つと解されている。しかし、主人公の *du'l-Qarnayn* をマケドニア王ではなく3世紀のヒムヤルの王としているのが、他に例を見ない独特な点である。おそらく当時の南アラビアに、ロマンスの主人公を彷彿とさせるような征服王がいたために、この王を歴史的モデルとする主人公が、『アレクサンダー・ロマンス』のプロットに従って活躍するという翻案が成立したのであろう。筆者は



アドゥーリス碑文の新解釈を提唱した前述の拙稿の結論部で、ヒムヤルの王ではなくこの碑文を著したアクスム王以外には、*du'l-Qarnayn* の歴史的モデルはありえないと主張した<sup>(40)</sup>。そこでは記さなかったその論拠は、以下の3点に要約できる。

第1に、アドゥーリス碑文に記録されているような大遠征は、当然人々に強い印象を与え、おそらく伝説化されて後の世の人々の記憶にも長く残ったであろう。そこで後世の諸伝承の中にその痕跡を探すと、内容的にも、また主人公が活躍した時代という点でも、南アラビア系の *du'l-Qarnayn* 伝説の他には、このアクスム王の活躍を偲ばせるものはない。次にエチオピア王名表のCグループに目をやると、3世紀の前半から半ば過ぎにかけて在位した第53代目の王 *Ella Eskendi* の名に気づかされる。エチオピア語としては極めて特異なこの名は、アラビア語の *al-Iskandar* の崩れた形と解する外ない。それにしてもエチオピア王名表のこの位置に、何故アレクサンダーのアラビア語名が入っているのかといえ、それはおそらく、この王名表の作成に利用された南アラビア系の伝承の中で同時代に置かれていた *du'l-Qarnayn*、即ちアラビアのアレクサンダーが、実はエチオピアのアクスムの王であったことを、王名表の作成者が知っていたからではなからうか。

3番目の論点は *du'l-Qarnayn* という名の由来である。アレクサンダーとは時代も地域も異なる世界の人物が、いくら大きな活躍をしたからといって、それだけでロマンスの主人公に擬せられるはずはない。すでに見た3名と同じく、彼の名の由来も同時代のアクスム王族の名に求められるのではなからうか。因みに通常この名は「二本角(を持った男)」と訳される。その命名の由来については諸説あって定まらないが<sup>(41)</sup>、アラビア語の *qarn* には「角」の他に「曙光」という意味があるので、*du'l-Qarnayn* は「曙光をもたらし者」という意味にもなる。エチオピアの王名にこれとほぼ同義のものを求めると、同じく「曙光をもたらし者」という意味の *Aṣḥəḥa* がこれに当たるであろう。それは後で見るように、4世紀のアクスム王で *Ella Abrehā* の兄弟の *Ella Aṣḥəḥa* の名が、アラビア語で

は Tubba' al-Aqran と訳され、ヒムヤル王の系譜の中に位置づけられていることから推察できる。

3世紀の碑文から名前の判明している残るアクスムの王族は3名、即ち世紀前半の碑文 Ja 576の中で「アクスム王 mlk/'ksmn」と呼ばれている 'dbh、及び西暦270/271年に当たる年紀のある MAFRAY-al-Mi'sāl 5の中で「二人のハバシャ王 mlky/Hḥst」と呼ばれている Dtwns と Zqrns がそれである。上述の拙稿では、Aṣbeḥa を南アラビア碑文では誤って 'dbh と表記したのではないかと推測したが<sup>(42)</sup>、音韻的に見て無理な解釈という批判を受けたので<sup>(43)</sup>、この点は後日改めて検討したい。Dtwns と Zqrns は語尾の形から見ると、他の名前とは趣が異なりギリシア語風である。アクスム貨幣の銘文も参照すると、少なくとも王の名について、3世紀の後半のある時期よりギリシア語風の命名が始まったらしいことが窺える。但し貨幣の銘文にはこの二人の名は出てこない。名前の意味もまた見当がつかない。筆者は、この二名のいずれか<sup>(44)</sup>、もしくはアスマラ北方のダッキー・マハリー Daqqī Mahari で発見されたギリシア語碑文 RIE 275 (DAE 3) の作者のアクスム王センプルーテース Sembrūthēs<sup>(45)</sup> が、碑文に記されているギリシア語風の名前とは別に、Aṣbeḥa という異名を有していたという可能性も念頭において、なお検討を続けたい。

さて、これでようやく Ifriqis に議論を戻すことができる。ハムダーニーやナシュワーンが伝えるこの一見奇妙な名は、「曙光」という意味の同根語があるところから見て、おそらく3世紀の半ば頃に在位したと思われるアクスム王 Aṣbeḥa の名のアラビア語訳がもとになっているのであろう。ところがこの王名にはアラビア語の qarn を使った別訳があり、それがイスカンダルの別名 du'l-Qarnayn を想起させた結果、ワフブの伝承に見られるような『アレクサンダー・ロマンス』の南アラビア版ヴァージョンが成立したのではなかろうか。つまり、Ifriqis も al-Ṣa'b du'l-Qarnayn も、同一のアクスム王の名の系統を異にするアラビア語訳と解せる。ただ、イブン・ヒシャームの伝承で、al-Ṣa'b du'l-Qarnayn が Abraha du'l-

Manār の息子ではなく父となっている理由は、現段階では説明できない。

(5) Tubba' al-Aqran と al-Rā'id Tubba' al-Akbar

この兩名が在位した4世紀には、ゲエズ語とギリシア語の碑文から 'Ēzānā/A(ei)zanās とその兄弟の Še'āzānā/Sa(ia)zanās の名が知られている。これらの名前の意味は不明であるが、兩名ともゲエズ語の異名を持っていたことが王名表から知られている。それがすでに言及した、Cグループでは第59・60代目に在位した兄弟王 Ella Abrehā と Ella Aṣbeḥa である。名前の意味はゲエズ語で解釈可能で、上で見たようにそれぞれ「照らす者」「曙光をもたらす者」を意味する。但し 'Ēzānā、Še'āzānā と Ella Abrehā、Ella Aṣbeḥa の対応関係は詳らかでない。ともかく、これらと二人のトゥツバアの名を比較することにしよう。

まず al-Aqran は「曙光」を意味する qarn の派生語なので、おそらく Aṣbeḥa のアラビア語訳である。他方 Rā'id は「まぶしいほど輝く」を意味する動詞 ra'ida の能動分詞なので、こちらは Abrehā の訳語として適当である。このようにここでも、トゥツバアの名はゲエズ語のアクスム王名のアラビア語訳となっている。もちろん Ella Ṣegāb や Ella Eskendi の場合のように、王名表の作成の方が当時流布していたアラビア語文献を資料としたと言えなくもないが、その場合には Ella Abrehā と Ella Aṣbeḥa の順序を逆にしたであろうから、ここではアラビア語からゲエズ語への再翻訳の可能性は低い。

この二人のトゥツバアの特徴は、すでに見た他のトゥツバアと異なり、アラビア語の命名法から見れば、実名 (ism) が伝わらず異名 (laqab) しか知られていない点である。この違いは、ことによるとこの兩名は、他のトゥツバア達のように自ら南アラビアに渡るといことがなく、おそらくそのために南アラビア碑文にも名を遺さなかったという事情に起因するのかもしれない。

## 考察と結論

以上見てきたように、シャンマル・ユルイシュに先立つ3代4人と、彼に続く2代の支配者の名前は、ヒムヤルに強い影響力を及ぼしたアクスム王もしくは王子の名前のアラビア語訳であった、と解釈することが可能である。この時期のヒムヤルは、3世紀においてはサバアやハドラマウトの攻撃に晒され、アクスムの支援を得てようやくこれを凌いでいたし、シャンマルの治世に続く4世紀には、複数の王が並立してどこに権力の中枢があるのか分からぬような状況であった。おそらくこのような時期にはアクスムの影響力が強まったのであろう。一方、シャンマル・ユルイシュとアブーカリブ・アスアド一族のように、実在のヒムヤル王の名が系譜上に現れる時期のヒムヤルは、王権が比較的安定しアクスムに対しても自立性が高まっていたと推察できる。

歴史的にヒムヤルとアクスムの間にはこのような関係があったにもかかわらず、後世のアラブの伝承には、6世紀を除けばアクスムの進出や支配に関する言及は一切見られず、アクスム王の名前はアラビア語に訳されてヒムヤル王の系譜に組み込まれてしまった。これは、後世の学者の目から見た自民族の歴史の解釈、あるいは彼らの手による歴史の再構成と言ってもよいであろう。彼らは3世紀以降の南アラビアにおけるヒムヤルとアクスムの政治的関係を、ヒムヤル王の擬制的な系譜の形を通じて表現したのである。

但し、再構成の仕方は一通りではなかった。ハムダーニーやナシュワーン（及び『ヒムヤル頌詩』の註解者）によれば、主要な支配者達は父子関係でつながる一つの王朝を形成していたが、イブン・ヒシャームの伝によれば王朝は単一ではなく、おそらくアクスムの王族によって構成されているハーリスに始まる王朝、シャーミル・ユルイシュの王朝、さらにはアスアド・アブーカリブの王朝など、複数の王朝が継起するという形で歴史が構想されている。明らかにこちらの方が史実を正しく伝えているが、後世さらに人為の手が加わると、ハムダーニーやナシュワーン（及び『ヒムヤル頌詩』の註解者）に見ら

れるように、元来は別々の王朝に属していた人物が、父子関係でつながるような形で系譜が整理された。

この整理の最大のポイントは、碑文史料によればヤーシル・ユハンイム 1 世の息子であったシャンマル・ユハルイシュ、即ちシャンマル・ユルイシュをイフリーキースの息子とすることにより、ヒムヤル王の系譜をアクスム王族のそれに接ぎ木した点である。先に記したように、アクスムとヒムヤルの同盟関係はヤーシル・ユハンイム 1 世時代に崩れ、ヒムヤル軍とアクスム軍の戦闘の記録が残されている。そしてシャンマル時代の碑文からは、アクスム関係の記事が全く姿を消す。もしこれが、通説のようにシャンマルがアクスムの勢力をアラビアから一掃したことによるのであったなら、それは父王ヤーシルの事業を継承し完成させたことを意味するから、後世の伝承においても、彼はヤーシルの息子とされたに違いない。しかしハムダーニーやナシュワーン<sup>(46)</sup>は、彼をイフリーキースの息子としているのである。これは何を意味するのか。

その一つの手掛かりはマスウーディー al-Mas'ūdi (956没) の著書の中に見出される<sup>(47)</sup>。彼の記すところによると、すべてのイエメンの支配者がトゥツバアと称した訳ではなく、これはシフル Šīḥr とハドラマウトの住民までを支配下に置いた王に限られる称号であるという。シフルはアデン湾に臨むアラビア南岸の港町、一方のハドラマウトは、ここではワーディー・ハドラマウト流域の内陸部を指している。この両地の住民を支配したというのは、海岸部も内陸部も含めた広義のハドラマウト地方全体を支配下に置いたという意味で、ヒムヤルの王ではシャンマル・ユハルイシュが初めてこれを成し遂げた。それを機に彼が採用した Ḥḍrmwt/wYmnt という語を付加した新しい王号を、彼に続くヒムヤル王達も名乗った<sup>(48)</sup>。したがって、マスウーディーがトゥツバアと称したと言っている支配者とは、実はシャンマル以降のヒムヤル王に他ならない。誰が最初のトゥツバアであったかという点について、伝承間で説が分かれていることは最初にも記したが、シャンマルが最初のトゥツバアであったことを意味するマスウーディーのこの記事は、実に示唆に富

んでいる。その理由を説明するために、「トゥッバアとは何であったのか」という問いに対する筆者の答えを、以下に仮説として提示しよう。

アラビア語動詞 *tabi'a* の語義は「後に従う、続く、継ぐ」であるが、類似の意味を持つ動詞に *'aqaba* と *ḥalafa* がある。これらの派生語 *'āqib* と *ḥalifa* がともに「代理」という意味を持つことから見て、*tabi'a* の派生語の *tubba'* もかつては同様の意味を表したのではなかろうか。つまりこれは元来は、アクスム王の宗主権の下に置かれたヒムヤル王の、アクスム王の名代としての機能を指す語ではなかったか。ヒムヤル王のこのような立場を示しているのではないかと思われる史料として、RES 3904 (Ist 7608 bis) を挙げよう。欠損の極めて多い碑文であるが、その7-8行目に [...] *'mlkm /lḤmyrm/w'qbtm/lngšt/'[ksmn/...]yt'bdnn/l'mlk/'ksmn* 「(ヒムヤル王 *Smyf'/'šw'* と彼の一族は) ヒムヤルの人々に対しては王として、アクスム王に対しては名代として、アクスム王に仕える」と記されていて、ヒムヤル王の対内的・対外的な二重の機能が窺える。この碑文では *'āqib* という語が使われているが、*tubba'* はその同義語であるというのが筆者の解釈である<sup>(49)</sup>。

これには劣るかもしれないが、もう一つの可能性も指摘しておく。 *tubba'* には「影」という意味があるが、これが転じて「代理」に近い意味を持った可能性はないであろうか。アラビア語の *al-sultānu ẓillu'llāhi fi'l-arḍi* 「支配権は地上における神の影である」という表現<sup>(50)</sup> から類推すると、ヒムヤル王は南アラビアにおけるアクスム王の「影」という意味で *tubba'* が使用された可能性もある。類似の表現としては、解釈に異論の多い CIH 541 のアブラハの称号 *'zly/mlkn/'g'zyn/rmḥš/zbymn/mlk/sb'* (etc.) がある。ここを「エチオピア王の影にして槍、イエメンにおいてはサバア…(省略)…の王」<sup>(51)</sup> と訳すことが出来るならば、この場合も、南アラビアにおけるエチオピア王の名代であると同時にこの地の王でもあるという、アブラハの二重の機能が称号に反映していると思われることが出来よう。

トゥッバアの本質をこのように理解することにより、シャンマル・ユハルイシュとアクスムの関係を、次のように解釈することが可能となる。即ち、具体的なプロセスを示す史料は未発見であるが、おそらくシャンマルは、父のヤーシル・ユハンイム1世の政策を改め、アクスムとの間に新たな同盟関係を構築する途を選択したのでであろう。その関係は対等なものではなく、アクスム王の宗主権を認め、自らはその名代としての地位に甘んずるという関係であったと推察されるが、その代償としてシャンマルは、ヒムヤル国内における自治権を保証されたのみならず、サバアとハドラマウトを併合し南アラビアを統一するに足るだけの軍事的支援を獲得したのではあるまいか。

シャンマルの時代にアクスムに言及した碑文が全く見当たらないのは、このような形でヒムヤルとアクスムの関係が安定し、南アラビアにおけるヒムヤルの覇権が確立した結果、アクスム王は南アラビアの支配をシャンマルに任せて、自らは軍の大部分を率いてアラビア半島から撤退したからではないのか。またハムダーニーやナシュワーンは、このような両者の関係を知っていたからこそ、あえてシャンマルをヤーシルの子とはせず、アクスム王族の系譜に結び付けたのであろう。さらに、シャンマルのこの政治的決断と、彼の後継者達はその政策を踏襲したという事実が、マスウディーの書に見られる、トゥッバアという称号は彼に始まるという伝承を生んだのではあるまいか。

しかしこのような解釈に対しては、それでは何故アクスムの王までがトゥッバアと呼ばれているのか、という反論の出ることが予想される。王の名代として南アラビアで活動した王子の場合とはもかくとして、王自身は名代でもなければ影でもない。したがっておそらく元来は、彼らがこう呼ばれることはなかったであろう。しかし後世、アラビア語化された彼らの名前がヒムヤル王の系譜に組み込まれた段階になって、彼らもまたタバアの一員として誤認されるようになったのではないか。そしてその頃には、この語の本来の意味も忘れ去られ、あたかもこれがヒムヤルの王号であるかのよう

な誤解がまかり通る事態となっていたのであろう。

以上が、タバールビアの实体と、彼らが活動した時代の南アラビアの歴史に関する筆者の仮説である。

### 註

- (1) Cf. A. von Kremer, *Die Himjarische Kasideh*, Leipzig, 1865; W.F. Prideaux, *The Lay of the Himyarites by the Kadhi Neshwan Ibn Sa'id* [sic], Sehor, 1879.
- (2) Našwān b. Sa'id al-Ḥimyārī, *Mulūk ḥimyar wa-aqyāl al-yaman*. Ed. by 'Alī b. Ismā'īl al-Mu'ayyad and Ismā'īl b. Aḥmad al-Ġarāfī, al-Qāhira, 1378h./1958-59m. (以下 *Mulūk ḥimyar* と略)。この書は『ヒムヤル頌詩』とそれへの詳細な註解から成っている。著者名がナシュワーンになっているのは、彼自身が註解者でもあると、校訂者が判断したことによる。
- (3) A. von Kremer, *Über die südarabische Sage*, Leipzig, 1866, p. 45.
- (4) Aḥbār 'Abīd b. Šarya al-Ġurhumī fī aḥbār al-yaman wa-aš'ārī-hā wa-ansābi-hā; Abū Muḥammad 'Abd al-Malik b. Hišām, *Kitāb al-tiġān fī mulūk ḥimyar 'an Wahb b. Munabbih, Šan'ā'*, [1980] (rpr. of Ḥaydarābād, 1347h./1928-29m.) (以下 *Kitāb al-tiġān* と略)。現行の前書の刊本は、後者の323頁以降に付録のような体裁で収められている。後者は、ワフブ作と伝えられる書(湮滅)を典拠として、イブン・ヒシャームがヒムヤルの伝説的な諸王の事績を書き綴ったものである。
- (5) F. Krenkow, "The Two Oldest Books on Arabic Folklore," *Islamic Culture* 2 (1928), pp. 235-236; F. Rosenthal, "From Arabic Books and Manuscripts I: Pseudo-Ašma'ī on the Pre-Islamic Arab Kings," *Journal of the American Oriental Society* 69 (1949), p. 91; id., "IBN SHARYA," *EP*, Vol. 3, Leiden, 1971, p. 937; W. Caskel, *Ġamharat al-nasab: Das genealogische Werk des Hišām ibn Muḥammad al-Kalbī*, Bd. 2, Leiden, 1966, p. 71, n. 6.



- (6) Cf. R.G. Khoury, *Wahb b. Munabbih*, Teil 1, Wiesbaden, 1972, pp. 189-302.
- (7) ナーゲルの見解では、イブン・ヒシャームがこの書を執筆するにあたって依拠したワフブ作と伝えられる書物は、実はワフブの手になるものではなく、南北アラブの党派的対立が激化したウマイヤ朝末期に、南アラブ系の人々の拠点であったエジプトにおいて作られたのであろうという (T. Nagel, *Alexander der Große in der frühhistorischen Volksliteratur*, Walldorf-Hessen, 1978, p. 58)。その理由等については拙稿「アラビアのアレクサンドロス——ズ・ル・カルナイン考序説——」『比較文化雑誌』4 (1989), 90-91頁を参照のこと。本稿では『王冠の書』の記事に言及するに際して、ワフブではなくイブン・ヒシャームの伝として引くことにする。
- (8) Cf. R. Blachère, M. Chouémi et C. Denizeau, *Dictionnaire arabe-français-anglais*, tome 2, Paris, 1970, pp. 998-999.
- (9) *Mulūk himyar*, p. 62; *Die auf Südarabien bezüglichen Angaben Našwān's im Šams al-'ulūm*, gesammelt, alphabetisch geordnet und herausgegeben von Aḥmad 'Aẓīmuddīn, Leiden, 1916 (以下 *Šams al-'ulūm* と略), p. 44.
- (10) この点を重視すれば、王朝名はハーリス朝の方が適切かもしれないが、王朝の実体を象徴的に表す名称として、フォン・クレマー (von Kremer, *Über die südarabische Sage*, p. 60) に倣ってトゥツバア朝の方を採用した。
- (11) Muḥammad 'Abd al-Qādir Bāfaqīh, "al-Ḥarīṭ al-Rā'iš wanasabu-hu al-muḥtalaf fi-hi," *Mélanges linguistiques offerts à Maxime Rodinson*, Paris, 1985, pp. 411-434. Cf. id., *L'unification du Yémen antique*, Paris, 1990, pp. 185-187.
- (12) 拙稿「古代南アラビアの紀元について」『オリент』31-1 (1988), 51-74頁。
- (13) この語はコーランの第44章 (煙) 36/37節と第50章 (カーフ) 13/14節に、「トゥツバアの民 qawm Tubba'」という形で初めて現れ、先イスラーム期のヒムヤルの人々を指したと一般に解されている。但し、ム

- ハンマドがどのような意味でこの語を用いたのか、正確には判らない。
- (14) 古代南アラビア語碑文は母音を表記しないので正確な読みは不明。  
以下の本文で人名を片仮名表記する際は、慣例に従った。
- (15) Abū Muḥammad al-Ḥasan al-Hamdānī, *Kitāb al-Iklīl*, II. Ed. by M. b. ‘Alī al-Akwa‘ al-Ḥiwālī, Bagdād, 1980, pp. 65-73.
- (16) *Mulūk ḥimyar*, pp. 60-149; *Šams al-‘ulūm, passim*.
- (17) *Kitāb al-tiġān*, pp. 88-144, 181-272, 305-314.
- (18) Šāmīr Yur‘iš の父の Nāšīr al-Ni‘am の名は、Yāsīr Yun‘im の綴りの崩れた形と解釈できる。
- (19) この図表を見る限りでは、ハムダーニーとナシュワーンを示す系譜は多くの点で一致している。しかし前者がハーリスを、自らの属するハムダーン族と関係の深いスイワール al-Šiwār の系譜に結びつけているのを後者は批判し、ハーリスの祖はヒムヤル・アル・アスガル Ḥimyar al-aṣġar で、あくまでも自身の属するヒムヤル族出自であることを強調する。*Mulūk ḥimyar*, p. 61; *Šams al-‘ulūm*, p. 43. Cf. Bāfaqīh, “al-Ḥarīṭ al-Rā‘iš,” pp. 428-434; id., *L’unification*, p. 186.
- (20) Cf. Ch. Robin, “La première intervention abyssine en Arabie méridionale (de 200 à 270 de l’ère chrétienne environ,” *Proceedings of the Eighth International Conference of Ethiopian Studies, University of Addis Ababa, 1984*, Vol. 2, ed. by Taddese Beyene, Addis Ababa, 1989, pp. 147-162.
- (21) アクスムの南アラビアへの進出の初期段階については以下の拙稿に詳しい：「古代南アラビア碑文に現れるアビシニア人」『日本オリエント学会創立三十周年記念オリエント学論集』刀水書房、1984年、279-295頁；「古代南アラビア碑文に現れるアビシニア人（二）」『日本オリエント学会創立三十五周年記念オリエント学論集』刀水書房、1990年、193-213頁。
- (22) 私見によれば、紅海の彼方よりの侵入者と最初に接したはずのティハマ地方に住む北アラブ系の人々が、アクスム王に派兵されて来寇した東アフリカ諸族を、初めはその正体を十分理解せぬまま、あるいは正体を知りながらも多少侮蔑的に「雑多な諸部族から成る集団」という程度の意味で総称したのがこの語の起源で、その後南アラブ系の人々がこ

れを借用したのであろう(前掲拙稿、280-282頁)。南アラビア碑文におけるこの語の意味は必ずしも明確でないが、一般には「アビシニア人」と訳され、アクスム王に率いられたエチオピア諸部族の連合体と解されている。文脈によって、支配者のアクスム人を含む場合とそうでない場合があるようである。Cf. Robin, *op. cit.*, p. 153.

- (23) Y. Shitomi, "A New Interpretation of the *Monumentum Adulitanum*," *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* 55 (1997), pp. 81-102.
- (24) アクスム王の支配は「諸王の王 *nəguša nagast*」という王号が示すように、臣属国の王や服属部族の族長の自律的な支配を認めたとえ、これを統合するという形態をとって、決して直轄的な支配ではなかった。したがって、アクスム王の宗主権を認め、課された義務を果たしている限り、臣族国側にも自律的な発展の余地はおおいに存在した。
- (25) Ch. Conti Rossini, "Les listes des rois d'Aksoum," *Journal Asiatique*, septembre-octobre 1909, pp. 283-295.
- (26) *ibid.*, pp. 313-320.
- (27) S. Dalley, "Gilgamesh in the Arabian Nights," *JRAS*, 3rd Ser., 1 (1991), p. 3, n. 14.
- (28) *Mulūk himyar*, p. 61.
- (29) D. Cohen, *Dictionnaire des racines sémitiques ou attestées dans les langues sémitiques*, fasc. 2, Paris, 1976, p. 102; W. Leslau, *Etymological Dictionary of Harari*, Berkely and Los Angeles, 1963, p. 69; E. Littmann und M. Höfner, *Wörterbuch der Tigrë-Sprache*, Wiesbaden, 1962, p. 600; M. Kropp, "Ein Gegenstand und seine Aufschrift. RIE 180=JE 5," *Etiopia e oltre. Studi in onore di Lanfranco Ricci*, Napoli, 1994, p. 136, n. 1.
- (30) A. de Biberstein Kazimirski, *Dictionnaire arabe-français*, tome 2, Paris, 1860, pp. 686-687.
- (31) W. Leslau, *Comparative Dictionary of Ge'ez*, Wiesbaden, 1987, pp. 103-104.
- (32) *Mulūk himyar*, p. 69.

- (33) Cohen, *op. cit.*, p. 50.
- (34) *Mulūk ḥimyar*, p. 70.
- (35) Cohen, *Dictionnaire*, fasc. 3, 1993, pp. 186-187; Leslau, *Comparative Dictionary*, p. 203.
- (36) *Mulūk ḥimyar*, p. 71.
- (37) Kazimirski, *op. cit.*, p. 583.
- (38) *Kitāb al-tiġān*, pp. 91-136. Cf. M. Lidzbarski, "Zu den arabischen Alexandergeschichten," *Zeitschrift für Assyriologie und verwandte Gebiete* 8 (1893), pp. 278-311; Krenkow, *op. cit.*, pp. 64-74; Nagel, *op. cit.*, pp. 9-32.
- (39) 『アレクサンダー・ロマンス』のイスラーム世界における変容と発展については以下を参照：前掲拙稿「アラビアのアレクサンドロス」72-98頁；山中由里子「アラブ・ペルシア文学におけるアレクサンドロス大王の神聖化」『国立民族学博物館研究報告』27-3 (2003), 395-481頁。
- (40) Shitomi, *op. cit.*, pp. 97-98.
- (41) 山中上掲論文、406-411頁参照。
- (42) Shitomi, *op. cit.*, p. 102.
- (43) W.W. Müller, "Südarabien im Altertum," *Archiv für Orientalforschung* 44/45 (1997/1998), p. 604; M. Kropp in a letter to the author dated September 3, 1998.
- (44) クロップは上記の私信の中で、音韻上の類似をもとに Zqrns を du'l-Qarnayn に比定することを提案している。
- (45) この名についても名前の意味は、ギリシア語でもアフロ・アジア語系の諸言語でも、うまく説明することができない。
- (46) *Šams al-'ulūm*, p. 57. これは『ヒムヤル頌詩』の註解者だけでなく、ナシュワーン自身の見解でもあった。
- (47) Abū al-Ḥasan 'Alī b. al-Ḥusayn al-Mas'ūdī, *Murūġ al-dahab wa-ma'ādin al-ġawhar* (Maçoudi, *Les prairies d'or*). Éd. et tr. par C.B. de Meynard et P. de Courteille, 2<sup>e</sup> éd., tome 3, Paris, 1917, p. 225.
- (48) ヒムヤル王の称号は、シャンマル・ユハルイシュの治世の途中で、

「サバアとヒムヤルの王」を意味する mlk/Sb'/wdRydn から、mlk/Sb'/wdRydn/wHđrmwt/wYmnt に変わった。新たに付け加えられた Hđrmwt はワーディー・ハドラマウト流域の内陸部を、Ymnt はその南のアデン湾の沿岸部を指している。

(49) このように、ヒムヤル王はアクスム王の名代としてヒムヤル国内の支配を任されていたと解することによって、南アラビアにアクスム支配の物的痕跡があまり残されていない理由も説明できる。ヒムヤルとアクスムの関係が安定した3世紀末以降、多数のアクスム兵がヒムヤル領に駐留するということは、非常時を除いてほとんどなかったのではあるまいか。

(50) Cf. I. Goldziher, "Du sens propre des expressions *Ombre de Dieu, Khalife de Dieu* pour désigner les chefs dans l'Islam," *Revue de l'histoire des religions* 35 (1897), pp. 331-338.

(51) Cf. A. J. Drewes, *Inscriptions de l'Éthiopie antique*, Leiden, 1962, pp. 108-111; F. Altheim und R. Stiehl, *Die Araber in der alten Welt*, Bd. 1, 1964, pp. 587-591; W. W. Müller, "Abessinier und ihre Namen und Titel in vorislamischen süarabischen Texten," *Neue Ephemeris für Semitische Epigraphik*, Bd. 3, Wiesbaden, 1978, pp. 159-168; M. Kropp, "Abraha's Names and Titles: CIH 541, 4-9 Reconsidered," *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 21 (1991), pp. 135-145; N. Nebes, "A new 'Abraha inscription from the Great Dam of Mārib," *ibid.* 34 (2004), pp. 221-230.